

ひとりになりたいときは部屋で過ごし、  
誰かと話をしたいときにはキッチンへ行きます。



リトアニアや北欧関係、尊敬する写真家の本など、本棚には本当に大切な本だけがおさまっている。

# No. 6

松陰 commons  
@東京・世田谷

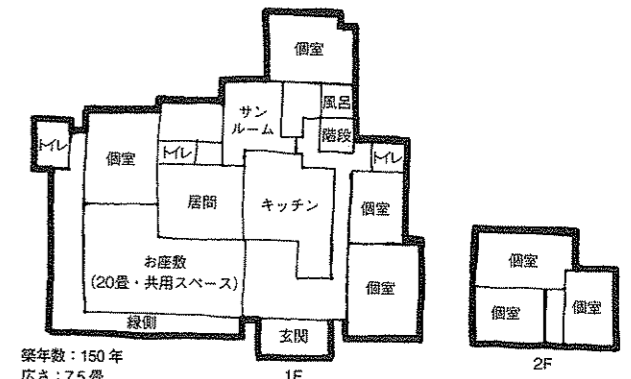
## 何回もの外国暮らしをへて だどりついたのは、 人の温もりがある家でした。

東京・世田谷にある『松陰 commons』は、2002年にシェアード型コレクティブリビングとして誕生した。築150年を超えるこの古民家では、現在、20～40代の男女7人が暮らしている。

文＝松村由美子 写真＝金子 睦  
Text by Yumiko MATSUMURA, Photos by Mutsumi KANEKO



Shouin Commons



築年数：150年  
広さ：7.5畳  
家賃：月6.9万円

### Life

浅沼通子 33歳 東京の出版社勤務

①「マイブルーベリーナイト」のサントラ。映画も好き。②朝食はチーズトーストとキウイ。夕食はカレーピラフ、ゆでナス with ジャコポン酢。

12～24歳 中学で英語に目覚める。高2の夏、米国にホームステイ。20～21歳に米国留学。大学卒業後、旅行会社を経て新聞社の編集社員に。

24～26歳 在外公館の派遣員としてリトアニアのヴィリニウスで暮らす。

26～31歳 米国の提携関係の大学院へ留学。卒業後、外務省の在外公館の専門職員としてコペンハーゲンへ。

31歳～ 実家で1年ほど暮らしたあと、'07年より「松陰 commons」へお引っ越し。



「そこだけ広く感じられる青い空。土のにおい。植物や樹木が発する春に特有のにおい。築150年の古民家「松陰 commons」の周囲には、別世界が広がっていた。木戸を開け、広い前庭をすんすん歩いていくと、地面にでんと根をはった木造家屋が目に入ってきた。縁側の窓ガラスももちろん木枠は開け放たれ、畳の大広間は朝の光をいっぱい浴びている。」「おはようございます。」

1年前からこの家に暮らす、浅沼通子さんが「おはようございます。」と挨拶する。浅沼さんが松陰 commons を知ったのは2年前のことだった。2003年から2年間、デンマークのコペンハーゲンに住んでいたんですが、デンマークでは、共同スペースを持つコレクティブハウスが普通の暮らし方のひとつなんです。私の友人にもそんな家に住んでいる人がいて、遊びにいったら、いろんな人がいて、キッチンにいてだけでも楽しくてたんだよね。それで、そういう暮らし方に興味を持つようになったんです。」

日本でも認知されはじめていて、コレクティブハウス、とは、台所や風呂、トイレのある独立した住居のほか、食堂などの共同スペースがある集合住宅のこと。家事労働や建物の管理・運営の一部を居住者が交代で担当するという暮らし方。ちなみに、松陰 commons は、台所、風呂、トイレを共用しているので、シェアード型コレクティブリビングに位置づけられている。'05年の9月に開業した浅沼さんは、さっそくコレクティブハウスを探し、松陰 commons に住まうことになった。

「庭やお座敷のある古民家に暮らせること。いっしょに住む人数が7人と少なかつたこと。全員独身で、年齢が近かったことが決め手でした。」

人がいて、遊びにいったら、いろんな人がいて、キッチンにいてだけでも楽しくてたんだよね。それで、そういう暮らし方に興味を持つようになったんです。」

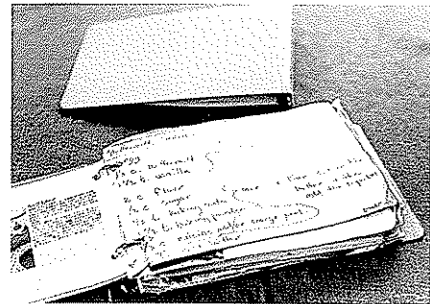


**No. 6**  
松陰コモンズ  
@東京・世田谷

玄関のホワイトボードにはメッセージが。在・不在もひと目でわかる。下ノ首使っていた掃除当番表。



休みの日はお座敷で庭を眺めながら朝食を食べたり、新聞を読んだりするそう。至福の時間だ。



ぼろぼろのレシピブックは宝物だ。ホームステイ先で教わったものなど、今まで住んだ土地の思い出が詰まっている。



大家さん夫妻の寝室だったという部屋は収納がたっぷり。これ以外に半間分の布団収納スペースがある。



浅沼さんの部屋はいつでも引っ越しができそうなほどシンプル。何度も、海外で暮らしていたせいかもしれない。



部屋から眺める景色が大好き。季節感が感じられるのもこの家の好きなのところのひとつだ。



同じ時刻に台所にも、別々に食事をするのが普通。無関心のようにだけど、冷蔵庫には「おすそわけ」のメモが。不思議〜。

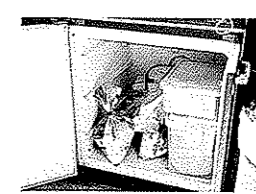
家族でもないけど  
家族みたい。  
すごい不思議な関係で



電気釜は早い者勝ちで使える。住人にはひとり暮らしをしていた人が多いので、台所家電は異常に充実している。



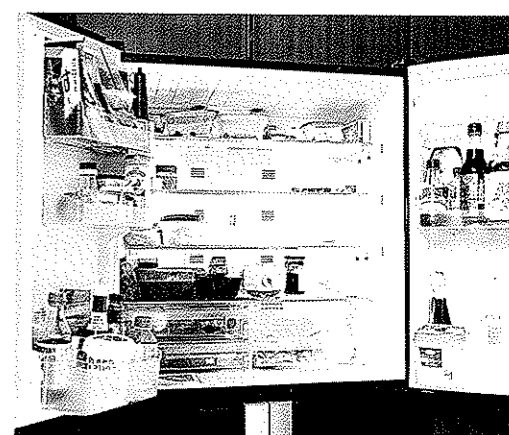
個人の食器や食料を収納。浅沼さんは真ん中の2段。このほか、共用の食器が収まった大きな食器棚がある。



米や味噌は各自用意する決まりだ。よって米びつは7人分ある。



「SS」シールは共用品。「S」シールは私物だけを使ってOKのしるし。



大きな冷蔵庫が2台あり、使える場所がふりわけられている。盗み食い?などのトラブルはほとんどないとか。

「松陰コモンズ」には暗黙のルールがある。プライベートに干渉しないことだ。お互いに部屋を訪問することもない。「話をしたいときはキッチンにいけますが、部屋にいてもお風呂とかトイレの音がして、家族と住んでいるみたい。でも、家族ほど距離が近くないから楽ですね。」もちろん、明文化されたルールもある。食事は各自で作る。が、多めに作ったので「どうぞ」なんぞのメモが貼ってあったり、ホワイトボードで呼びかけて、いつしよに食べることもあるそう。掃除はエリア割り当て制で、風呂、台所、床など、同じエリアを長期間、受け持つ。以前は1週間交代だったが、スルーする人がいたりして問題になったため、当番の顔が見える今のルールにしたのだという。家賃は広さで異なるが、水道、光熱費などは共有の引き落とし口座で管理。毎月1万円入金し、年に一度精算する。また、「月直」と呼ばれる買い物当番があって、みんなから2500円徴収し、基本調味料などの生活必需品を買いそろえる。禁止事項はタバコ。門限はなく、友だちを泊めてもOK。自分の部屋だと1泊1000円、お座敷で寝る場合は500円かかる。

**名物、お座敷イベント!**  
松陰コモンズがユニークなのは、縁側と20畳のお座敷を、外部に開放していることだ。お座敷ではライブや演劇、地域の人の

会合など、さまざまな催しが開かれている。それによって、7人の居住者だけでは得られない豊かな暮らしを楽しんでいるのだ。居住者同士、あるいは外部との関係を築くために、居住者は日々の暮らしやイベントの運営に関するミーティングを月1回開いているが、浅沼さんは最初の3か月、それが少々、難儀に感じられたという。「連絡はメールでとりあうんですが、パソコンを開くと、松陰コモンズ関連のものが10通くらい来てたりして...苦笑。でも、自分のできる範囲で関わって、少し肩の力を抜いたら楽になりました。今までは自分の判断基準からするものは受け入れられなかったんですが、今は、なるべくそのまま受け入れるようにしています。みんなもやってみようとしているし、いちいちこだわっていたら、疲れちゃいますからね。」ちょっとり朗らかなになった浅沼さんが、松陰コモンズに引っ越してよかったと思うのは、居住者やお座敷イベントを通じて、今までの生活の延長線上では絶対に知り合えないような人と出会えたこと。それと人を招ける家に住めたことだ。

「この前、デンマークパーティーを開いたんです。デンマークフェアで大量のソーセージを買い込んで、友人を10人くらい呼んで、庭でバーベキューをしたんです。知り合いのデンマーク人が縁側に寝っ転がって、ヒュゲリ、デンマーク語で心地いい」を連発していました。うれしかったですね」